

# 大人における 子どものおしゃれに 対する態度

Attitude of adults toward the adornment of children

鈴木公啓 SUZUKI, Tomohiro

東京未来大学こども心理学部 准教授

子どものおしゃれの低年齢化が進んでいると言われている。そのような現状において、本研究では、子どものおしゃれに対する大人の態度について、デモグラフィック要因との関連からその特徴を明らかにすることを目的とした。子どものおしゃれに対してどのように向き合っていくかは、社会そして教育の現場において重要な問題であるといえる。

キーワード おしゃれ, 装い, 子ども

## 1. 問題

近年、化粧の低年齢化が進んでいると言われている。以前は、子どもの化粧は、祭りの時など極めて限定した状況でしかおこなわれず、普段からおこなわれるものではなかった。そして、子どもが化粧に興味をもつことは否定的に見られていた。女性の化粧開始年齢は一般的には高校卒業時、つまり就職のときであり、化粧は社会に出るための大人の女性の身だしなみの一つとしてとらえられていた(石田, 2006)。しかし、1990年代の「女子高校生ブーム」において、女子高校生がアイメイクなどの化粧をおこなうようになり、それをマスコミが取り上げた。そして、その女子高校生の化粧は上の他の世代に影響を及ぼすだけでなく(石田, 2007)、次第に下の年齢層までも広がっていった(石田, 2006)。

今や、小学生や未就学児にまで化粧が浸透してきている。そして、それは化粧に限らず着装などの他の装いにおいても同様である(鈴木, 2018)。その装いは、過剰とみなされることも多

い。本論文では、子どもにおいて飾ることを主目的とした装いを子どもの「おしゃれ」として論を進める。

### 1-1. 子どものおしゃれの低年齢化の実態

現在の日本では、メディア等により、おしゃれへの興味や関心を増長させるような商品やサービス、そしてメッセージが提供されている。例えば、少女を対象としたファッション雑誌は1990年代後半から複数刊行されている。小学生や中学生を対象とした主要なものとして、1997年には「nicola」、2006年には「ニコ☆プチ」、2011年には「JSガール」、2012年には「キラピチ」そして2016年には「Aneひめ」が刊行されている。日本雑誌協会によると、20年ほど前に刊行された「nicola」の印刷証明書付き発行部数は、刊行当時は20万部を切っていたが、この10年ほどは基本的には20万部を超える状態で推移している。この間、他の雑誌が刊行されているにもかかわらず当該雑誌の発行部数が段階減少していないことから、女子向けのファッション雑誌全体と



しては、20年前に比べて数多く刊行され、そしてそれを多くの子どもが目にしてることが想定される。このような状況においては、子どもが外見を意識するようになり、また、おしゃれに興味を持ち、そして、実際におしゃれをするようになるのは、当たり前のことともいえよう。

子どもにおいておしゃれが広がっていることが、いくつかの調査により確認されている。小学生を対象とした調査により、小学生の半分にメイク経験があり、そしてその8割が楽しさを感じていること(株式会社ジェイ・エム・アール生活総合研究所,2013)、また、都内の12歳以下の子どもをもつ親を対象とした調査により、女子の45%に化粧の経験があること、そして行事などが最初の化粧の動機であってもその後も「時々化粧をする」と回答した者が10%存在すること(東京都生活文化局,2007)などが明らかにされている。中学生の女子で普段のおしゃれとしてメイクをおこなっている者が72.5%いること、「口紅・グロス」の使用が最も多く、中学生全体では39.6%が使用し、3年生に限定するとビューラーの使用が46.2%であることなども報告されている(大久保・斉藤,2014)。なお、化粧開始時期については、対象者が10代の場合には14歳と15歳が多く、対象者が20代の場合には15歳と16歳が多いこと、また、年齢層が高い群に比べて若い群は開始時期が早いことが明らかとなっている(玉置・横川,2003)。そして、大学生対象の調査では、スキンケアやメイクアップの開始時期が中学1年生から高校1年生の間に集中していることも示されている(石田,2006)。

化粧以外のおしゃれの子どもへの広がりも確認されている。毛染めは、12歳以下の子どもの4.1%が経験しており、さらに、その経験者の中で就学前に経験した者の割合は63%であることも報告されている(東京都生活文化局,2007)。脱毛・除毛(所謂むだ毛処理)も装いの1つであるが、高校生の3割がアンダーヘアの手入れをしているだけでなく(株式会社ジンコーポレーシ

ン)、3歳の子どもがエステサロンの脱毛を利用しているという事例も紹介されており(朝日新聞,2010)、同様に低年齢化がみとめられる。さらに、痩身という装いの低年齢化も示唆される(株式会社ベネッセコーポレーション,2001;鈴木,2017a)。広い範囲において、子どもにおしゃれが広がっていることが確認できる。玉置・横川(2003)も、朝日新聞(1992)における花王の調査結果と比較し、おしゃれの低年齢化が加速していることを指摘している。

それでは、現在もおしゃれの低年齢化は一層進んでいるのであろうか。上述の調査の行われた時期の幅は広く、比較的古いものも散見される。玉置・横川(2003)の低年齢化の指摘からもさらに年月は経ている。現在の子どものおしゃれの実態はどうなっているのであろうか。

近年、鈴木(2018)は、日本全国に居住する3歳以上の未就学児、小学生、中学生、高校生の娘がいる母親1,184名を対象とし、子どもの幅広いおしゃれの実態等について明らかにしている。ここでは、スキンケア、メイクアップ、ネイル、そしてアクセサリについては、未就学児であっても3割から4割が、頻度はともかく経験していることが確認されている。脱毛・除毛は、未就学児では経験者が2割を切っているが、年齢層が上がるにしたがって経験頻度は増加し、高校生では最終的に経験者が6割を超えることも示されている。従来の調査においては、おしゃれの内容や対象の年齢層が限られていたため、鈴木(2018)の知見を従来のものと直接比較するのは難しい。しかし、少なくとも現代日本における未就学児を含む子どもにおいて、おしゃれがそれなりの割合で実施されていることが確認できる。

なお、子どものおしゃれの低年齢化と同時に、おしゃれが身体に生じさせる問題の低年齢化についても指摘がなされている(e.g.,岡村,2003;鈴木,2018)。身体に生じるトラブルは、化粧品やアクセサリによる皮膚のかぶれや、マニキュアによる爪の障害など多岐にわたる。東京都生活

文化局(2007)によると、化粧によるトラブルを経験した子どもが2.2%いることが明らかにされている。化粧以外のおしゃれによる身体トラブルについても、幅広い装いによるものについて報告がなされている(鈴木,2018)。子どもの皮膚は構造的にも免疫学的にも未熟であり、また、子どもは社会的にも未熟でおしゃれ用品の使い方に関する問題があることが多いため、子どもにおいて身体トラブルが生じる者は多くみられる(岡村,2011)と言われている。実際、鈴木(2018)においては、特に未就学児のおしゃれ経験者における身体トラブルの経験割合は大きく、例えばピアスや毛染め、体毛の脱毛・除毛などでは3割を超えることも示されている。子どものおしゃれによる身体トラブルは、看過できる問題では無いといえよう。

ところで、子どものおしゃれには親の影響が大きいとされている。子どもが母親からスキンケア情報を教わっていることも示されている(株式会社ジェイ・エム・アール生活総合研究所,2013)。また、子どもがおしゃれについて母親の意見を取り入れていることも確認されている(向川,2006)。さらに、子どものおしゃれには、おしゃれに関するコミュニケーションだけでなく、母親の子どものおしゃれに対する許容といった態度が影響していることも示されている(鈴木,2018)。広がっている子どものおしゃれの背景要因について理解するには、親など周囲の人の影響を明らかにする必要がある。そのためにも、社会において大人がどのような態度を有しているのかを把握しておくことは有用といえる。

## 1-2. 目的

子どもがおしゃれを行うようになり、従来の大人の認識がある意味では時代遅れになりつつある可能性がある現状において、社会がおしゃれの低年齢化をどのように受けとり、そしてどのような対応をおこなうのかについて考えていくことは、健全な社会の構築のためには重要と

いえる。それが最終的に子どものおしゃれを受容するということであってもそうでなくとも、そのプロセスは必要といえる。

そこで本研究においては、まず、社会の受容の程度の一つとして、子どものおしゃれについて成人がどのような態度を有しているのかを明らかにすることを目的とする。明らかにするのは以下の点である。まず、子どものおしゃれがいつ頃からであれば許容できると思うか、その許容の時期について明らかにする。また、子どものおしゃれについてどのように考えているのかについても明らかにする。そして、子どものおしゃれの現状についての認識を把握するための1つとして、子どもを対象とした商品である子ども用化粧品(キッズコスメ)を知っている程度についても明らかにする。これらの検討においては、各種のデモグラフィック要因との関連を主に検討をおこなう。幅広い年齢層の成人男女を対象とし、性別と年齢層による違いについて検討していく。また、子どもの有無および子どもの性別との関連についても検討していく。なお、従来の研究において、女子が男子よりも外見についての興味や関心を有していることも示されており(大久保・斉藤,2014;向川,2006)、女子の方がおしゃれの低年齢化が進んでいることが想定される。そこで、今回は女子のおしゃれについて扱うこととする。

## 2. 方法

### 2-1. 調査対象および手続き

株式会社マーケティングアプリケーションズのweb調査サービス「アンとケイト」に登録しているモニター<sup>1)</sup>を対象に、2018年5月にweb調査を実施した。日本全国に居住する20歳から59歳の男性1,202名、女性1,202名の計2,404名を対象とした(平均年齢39.7歳,SD=11.40)。なお、対象の年齢層(10歳刻み)と性別は基本的にはほぼ同数に割り付けて実施した。既婚者は1,310



名 (54.5%) であった。子どもがいると回答した者は1,103名 (45.9%) であった。なお,回答者には換金可能なポイントが付与された。

## 2-2. 調査内容

子どものおしゃれに対する態度を把握するため,以下の内容について回答を求めた。

### (1) 子どものおしゃれの許容開始時期

一般的に子どもがおしゃれをおこなうとしたら,いつ頃からならおこなってもかまわないと思うか,おしゃれの内容毎にたずねた。おしゃれの内容は「スキンケア (化粧水や乳液などによる)」「メイクアップ (リップグロスやアイシャドウなどによる)」「ネイル (ジェルネイルやマニキュアなどによる)」「アクセサリによる装飾 (イヤリングやプレスレットなどによる。ただし,髪ゴムのリボンなどやピアスは除く。)」 「ピアス」「毛染め」「体毛の脱毛・除毛」「プチ整形・美容整形」の8つであり,それぞれ「小学生になる前」「小学生低学年」「小学生高学年」「中学生」「高校生」「それ以降」「いつになっても行わない方がよい」からあてはまる場所を選択するように求めた。

### (2) 子どものおしゃれに対する考え

子どもがおしゃれをすることについてどのように考えているかたずねた。項目の内容は,読売新聞 (2005) の項目および予備調査<sup>2)</sup>によって得た内容をもとに作成し,最終的に「似合うのであればよい」「(種類や程度が) それなりであればかまわない」「好きにすればよい」「何も問題ない」「かわいらしい」「遊びの1つ」「年齢的に早い」「必要ない」「生意気」「見苦しい・下品」「親の影響が大きい」「身体への影響が心配」の12項目を準備した。それぞれにどの程度あてはまるか「1. あてはまらない」から「4. あてはまる」の4件法で回答を求めた。

### (3) キッズコスメの認知度

キッズコスメの認知や購買経験について尋ねた。「知らなかった」「話では聞いたことがあるが実際に見たことは無い」「実際に見たことがある

が購入したことは無い」「購入したことがある」から回答を求めた。

## 3. 結果

男女別に子どものおしゃれの許容開始時期についてまとめたものを表1に示す。また,許容開始時期について累積した許容開始時期の割合をまとめたものを図1に示す。男性において,スキンケアの許容の累積が過半数を超えたのは高校生の時点であり,それ以外のおしゃれの許容の累積が過半数を超えたのは高校卒業以降であった。女性は,スキンケアの許容の累積が過半数を超えたのは中学生の時点であり,メイクアップ,ネイル,アクセサリによる装飾の許容の累積が過半数を超えたのは高校生の時点であった。それ以外のおしゃれの許容の累積が過半数を超えたのは高校卒業以降であった。プチ整形・美容整形許容の累積は,男性はいつまでも過半数を超えなかったが,女性においては高校卒業以降まで含めると過半数を超えていた。

上述のように,性差については,全体的に女性の方が早めに許容していた。それぞれのおしゃれ毎にマンホイットニーのU検定をおこなったところ,プチ整形・美容整形を除き,有意であった<sup>3)</sup>。また,プチ整形・美容整形の効果量 $r = .028$ を除き,全体としては効果量 $r = .108 \sim .248$ であった。

年齢との関連について,回答者の性別にスピアマンの順位相関係数を算出した (表2)。男性で $\rho = .141 \sim .210$ ,女性で $\rho = .137 \sim .345$ であった。また,すべて有意であった。年齢が高いほど許容開始時期が遅いこと,そして,その関連は全体としては女性の方が男性よりも強いことが示された。

次に,回答者の性別毎に,子どもの有無・性別と子どものおしゃれの許容開始時期の関連について検討した。なお,子どもの有無・性別については,回答拒否の者を除き,子どもがいな

表1 子どものおしゃれの許容開始時期

	小学生 になる前	小学生 低学年	小学生 高学年	中学生	高校生	それ以降	いつになっ ても行わな い方がよい	
男性	スキンケア	53 (4.4)	41 (3.4)	116 (9.7)	257 (21.4)	272 (22.6)	275 (22.9)	188 (15.6)
	メイクアップ	8 (0.7)	21 (1.7)	55 (4.6)	133 (11.1)	317 (26.4)	446 (37.1)	222 (18.5)
	ネイル	9 (0.7)	17 (1.4)	44 (3.7)	130 (10.8)	261 (21.7)	484 (40.3)	257 (21.4)
	アクセサリー による装飾	15 (1.2)	27 (2.2)	70 (5.8)	144 (12.0)	277 (23.0)	435 (36.2)	234 (19.5)
	ピアス	12 (1.0)	4 (0.3)	30 (2.5)	71 (5.9)	193 (16.1)	476 (39.6)	416 (34.6)
	毛染め	7 (0.6)	7 (0.6)	35 (2.9)	74 (6.2)	216 (18.0)	546 (45.4)	317 (26.4)
	体毛の脱毛・除毛	11 (0.9)	10 (0.8)	60 (5.0)	153 (12.7)	209 (17.4)	473 (39.4)	286 (23.8)
	ブチ整形・美容整形	7 (0.6)	9 (0.7)	24 (2.0)	42 (3.5)	75 (6.2)	408 (33.9)	637 (53.0)
	女性	スキンケア	48 (4.0)	38 (3.2)	172 (14.3)	357 (29.7)	346 (28.8)	197 (16.4)
メイクアップ		5 (0.4)	9 (0.7)	53 (4.4)	178 (14.8)	464 (38.6)	446 (37.1)	47 (3.9)
ネイル		18 (1.5)	37 (3.1)	86 (7.2)	158 (13.1)	304 (25.3)	508 (42.3)	91 (7.6)
アクセサリー による装飾		52 (4.3)	65 (5.4)	135 (11.2)	211 (17.6)	308 (25.6)	357 (29.7)	74 (6.2)
ピアス		2 (0.2)	4 (0.3)	18 (1.5)	58 (4.8)	304 (25.3)	615 (51.2)	201 (16.7)
毛染め		4 (0.3)	5 (0.4)	19 (1.6)	50 (4.2)	290 (24.1)	702 (58.4)	132 (11.0)
体毛の脱毛・除毛		6 (0.5)	16 (1.3)	72 (6.0)	202 (16.8)	276 (23.0)	509 (42.3)	121 (10.1)
ブチ整形・美容整形		4 (0.3)	5 (0.4)	7 (0.6)	18 (1.5)	84 (7.0)	513 (42.7)	571 (47.5)

注) 実施時には、本文記載のように、それぞれ内容の補足をおこなっている。括弧内はパーセンテージ。

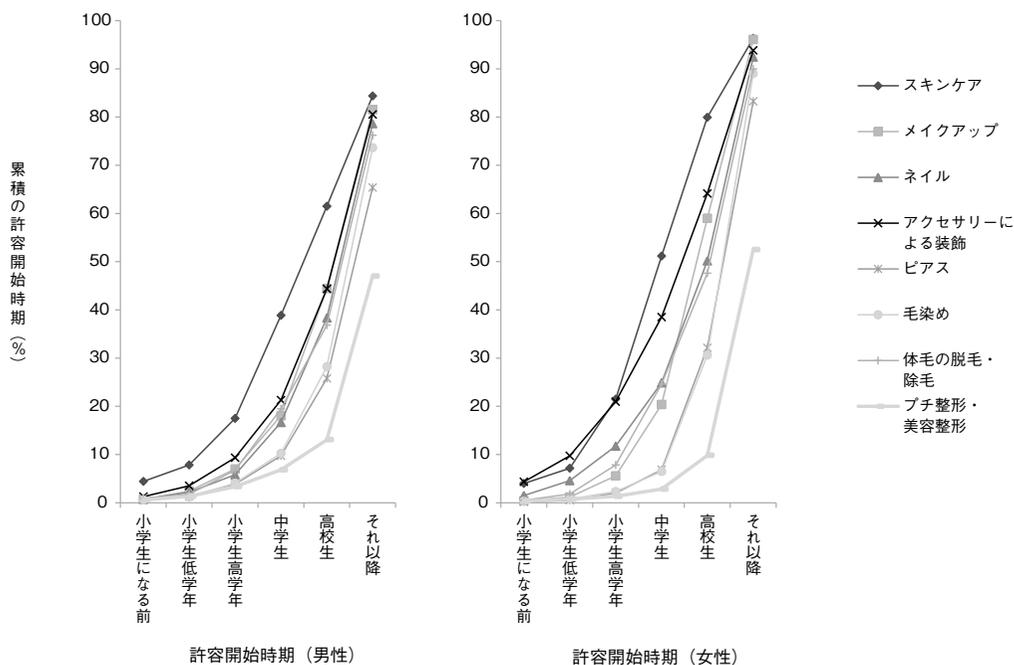




表2 子どものおしゃれの許容開始時期と年齢との関連

	スキンケア	メイクアップ	ネイル	アクセサリ-による装飾	ピアス	毛染め	体毛の脱毛・除毛	プチ整形・美容整形
年齢	.177 ***	.210 ***	.183 ***	.190 ***	.186 ***	.199 ***	.210 ***	.141 ***
	.177 ***	.345 ***	.329 ***	.331 ***	.270 ***	.300 ***	.137 ***	.205 ***

注) 上段は男性, 下段は女性。

\*\*\* $p < .001$ 。

い場合を「子ども無し群 (n=1,252)」, 息子のみいる場合を「男の子のみ有り群 (n=362)」, 娘のみまたは息子と娘がいる場合を「女の子有り群 (n=741)」とした。

それぞれのおしゃれ毎にクラスカル・ウォリス検定をおこなった。男性においては, メイク, ネイル, アクセサリ-, ピアス, 毛染めにおいて有意であり, 多重比較 (Holm法) をおこなったところ, メイクと毛染めでは子ども無し群が女の子有り群よりも有意に順位得点が高く, ネイルとアクセサリ-とピアスでは子ども無し群が他群よりも有意に順位得点が高いことが示された。しかし, 多重比較における効果量 $r$ が.10を超えるものはなかった。また, 女性においては, プチ整形・美容整形において有意であり, 美容整形では子ども無し群が他群よりも有意に順位得点が低いことが示された。しかし, 多重比較における効果量 $r$ が.10を超えるものはなかった。したがって, 子どもの有無・性別は子どものおしゃれの許容開始時期に実質的には大きく関連しないことが示された。

子どものおしゃれに対する考えの項目における回答割合を図2に示す。なお, 「あてはまる」と「どちらかというにあてはまる」の回答を合わせた割合の大きい順に並べ替えている。

これらの項目に対して因子分析 (最尤法・プロマックス回転) をおこなった。スクリープロットや負荷量等をもとに, 2因子が抽出されると判断した。抽出された因子に対応する項目の内容から, 2つの因子はそれぞれ子どものおしゃれに対する許容的な考えと非許容的な考えを意味していると考えられた。そこで, それぞれの因子名を「子どもおしゃれ許容」と「子どもおしゃ



図2 子どものおしゃれに対する考えの回答割合

れ非許容」とした。そして, それぞれの因子に対する因子負荷量大きい項目の平均値を算出し, 子どもおしゃれ許容得点および子どもおしゃ

れ非許容得点として以降の分析に用いた。因子分析の結果を表3に示す。なお、子どもおしゃれ許容のクロンバックの $\alpha$ は.90、子どもおしゃれ非許容のクロンバックの $\alpha$ は.86であり、それぞれ内的整合性に問題無いことが確認された。なお、子どもおしゃれ許容得点と子どもおしゃれ非許容得点の相関は $r=-.181$ であった<sup>4)</sup>。性別と10歳刻みの年齢層別の子どものおしゃれ許容得点と子どもおしゃれ非許容得点の平均値を図3に示す。平均値からは、全体として、子どもおしゃれ許容得点は年齢層が上であるほど得点が低く、子どもおしゃれ非許容得点は年齢層が上であるほど得点が高い傾向が確認された。また、女性の方が男性に比べその特徴が大きいことも確認された。

ここで、性別と年齢、子どもの有無・性別を独

立変数、子どもおしゃれ許容得点と子どもおしゃれ非許容得点をそれぞれ従属変数とした一般線形モデルによる分析をおこなった(表4)。男性においては年齢と子ども有無・性別、そして性別と年齢の交互作用が有意であった。女性においては、性別と年齢と子ども有無・性別、そして性別と年齢の交互作用が有意であった。しかし、効果量偏 $\eta^2$ は、子どもおしゃれ許容得点と子どもおしゃれ非許容得点のどちらにおいても、年齢の主効果のみが比較的大きい値であった(それぞれ0.03と0.02)。年齢が高いほど子どもおしゃれ許容得点は低く、また、子どもおしゃれ非許容得点が高いという結果であった。

ここで、子どもおしゃれ許容および子どもおしゃれ非許容得点と、子どものおしゃれの許容開始時期との関連について、スピアマンの順位相

表3 おしゃれに対する考えの因子分析結果

因子名	項目	F1	F2	共通性
子どもおしゃれ許容	似合うのであればよい	<b>.815</b>	.021	.657
	(種類や程度が)それなりであればかまわない	<b>.806</b>	.057	.633
	好きにすればよい	<b>.797</b>	-.005	.638
	何も問題ない	<b>.780</b>	-.073	.640
	かわいらしい	<b>.743</b>	-.031	.564
	遊びの1つ	<b>.731</b>	.081	.514
子どもおしゃれ非許容	年齢的に早い	-.047	<b>.823</b>	.696
	必要ない	-.077	<b>.768</b>	.622
	生意気	.000	<b>.740</b>	.547
	見苦しい・下品	-.078	<b>.720</b>	.549
	親の影響が大きい	.164	<b>.653</b>	.405
	身体への影響が心配	.084	<b>.609</b>	.355
因子間相関	F1	-	-.224	
	F2		-	

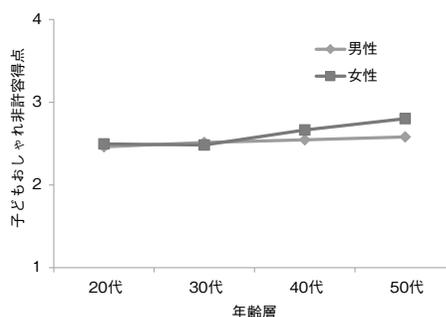
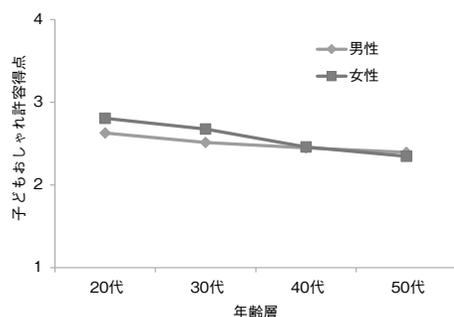


図3 性別と年齢層による子どもおしゃれ許容得点および子どもおしゃれ非許容得点



関係数を算出した(表5)。子どもおしゃれ許容と子どものおしゃれの許容開始時期との関連は  $\rho = -.31 \sim -.16$ , 子どもおしゃれ非許容と子どものおしゃれの許容開始時期との関連は  $\rho = .09 \sim .17$  であり, すべて有意であった。子どものおしゃれを許容しているほど許容開始時期が早いことが示された。子どものおしゃれの非許容については, 特段の関連は確認されなかった。

性別と年齢, 子どもの有無・性別, およびそれらの交互作用項<sup>5)</sup>を独立変数, キッズコスメについての認知度や購買経験を従属変数とした順序ロジスティック回帰分析をおこなった。なお, 子どもの有無・性別については, 男の子がいる場合と女の子がいる場合のそれぞれのダミー変数(男の子あり, 女の子あり)を作成した。また, 年齢についても, 非線形な関係が確認されたため, 年齢層(10歳刻み)のそれぞれのダミー変数(30代,

40代, 50代)を作成した。分析結果を表6に示す。モデルは  $R^2$  (McKelvey & Zavoina) = .100,  $\chi^2(17) = 206.36$  であり有意であった。各独立変数については, 「性別」と「女の子あり」のオッズ比の値は大きく, 「年齢(50代)」のオッズ比の値は小さいことが示された。また, 「性別」と「年齢(50代)」の交互作用のオッズ比の値は大きく, また, 「年齢(50代)」と「女の子あり」の交互作用のオッズ比が小さいことが確認された。「性別」と「年齢(50代)」別にキッズコスメについての認知度や購買経験についてまとめたものを表7に, 「年齢(50代)」と「女の子あり」別にキッズコスメについての認知度や購買経験についてまとめたものを表8に示す。単純主効果の検定をおこなったところ, 男性においては50代の方が値が有意に小さく, また, 50代であってもなくても, 女性の方が有意に値は大きいことが示された。女の子がいる場

表4 子どもおしゃれ許容得点および非許容得点についての分析結果

		F (1,2343)	partial $\eta^2$
子どもおしゃれ許容	性別	3.23	0.001
	年齢	77.30 ***	0.032
	子ども有無・性別	5.86 **	0.005
	性別×年齢	8.37 **	0.004
	性別×子ども有無・性別	0.10	0.000
	年齢×子ども有無・性別	0.03	0.000
	性別×年齢×子ども有無・性別	0.02	0.000
子どもおしゃれ非許容	性別	6.42 *	0.003
	年齢	39.73 ***	0.017
	子ども有無・性別	5.77 **	0.005
	性別×年齢	8.70 **	0.004
	性別×子ども有無・性別	0.43	0.000
	年齢×子ども有無・性別	0.15	0.000
	性別×年齢×子ども有無・性別	0.76	0.001

注) \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$ 。

表5 子どもおしゃれ許容および非許容と子どものおしゃれの許容開始時期との関連

	子どもおしゃれ許容	子どもおしゃれ非許容
スキンケア	-.22 ***	.09 ***
メイクアップ	-.30 ***	.17 ***
ネイル	-.31 ***	.16 ***
アクセサリーによる装飾	-.31 ***	.17 ***
ピアス	-.24 ***	.17 ***
毛染め	-.24 ***	.16 ***
体毛の脱毛・除毛	-.18 ***	.11 ***
プチ整形・美容整形	-.16 ***	.13 ***

注) \*\*\* $p < .001$ 。

合において、50代で無い方が有意に値は大きく、  
 また、50代であってもなくても、女の子がいる方  
 が有意に値が大きいことが示された。

表6 順序ロジスティック回帰分析結果

	偏回帰係数	SE (95%CI)
性別	0.848	0.084 (1.980-2.755) ***
年齢(30代)	-0.045	0.135 (0.734-1.246)
年齢(40代)	-0.189	0.136 (0.634-1.081)
年齢(50代)	-0.548	0.137 (0.442-0.756) ***
子ども(男の子あり)	-0.075	0.103 (0.757-1.135)
子ども(女の子あり)	0.742	0.105 (1.709-2.579) ***
性別×年齢(30代)	0.358	0.249 (0.878-2.330)
性別×年齢(40代)	0.473	0.255 (0.974-2.642)
性別×年齢(50代)	0.571	0.259 (1.065-2.941) *
性別×子ども(男の子)	-0.086	0.194 (0.627-1.341)
性別×子ども(女の子)	-0.003	0.195 (0.681-1.460)
年齢(30代)×子ども(男の子)	-0.297	0.333 (0.387-1.427)
年齢(30代)×子ども(女の子)	-0.522	0.345 (0.302-1.166)
年齢(40代)×子ども(男の子)	-0.529	0.332 (0.307-1.129)
年齢(40代)×子ども(女の子)	-0.552	0.340 (0.296-1.120)
年齢(50代)×子ども(男の子)	-0.633	0.331 (0.278-1.016)
年齢(50代)×子ども(女の子)	-1.000	0.341 (0.189-0.718) **
R <sup>2</sup>	0.100	***

注) \*\*\* $p<.001$ , \*\* $p<.01$ , \* $p<.05$ 。

表7 「性別」と「年齢(50代)」別のキッズコスメについての認知度や購買経験

		知らなかった	聞いたことはある	見たことはある	購入経験あり	合計
男性	年齢(50代)	216 (73.2)	67 (22.7)	9 (3.1)	3 (1.0)	295 (100.0)
	年齢(50代以外)	558 (63.5)	211 (24.0)	72 (8.2)	38 (4.3)	879 (100.0)
	合計	774 (65.9)	278 (23.7)	81 (6.9)	41 (3.5)	1,174 (100.0)
	年齢(50代)	140 (47.6)	111 (37.8)	36 (12.2)	7 (2.4)	294 (100.0)
女性	年齢(50代以外)	385 (43.4)	290 (32.7)	150 (16.9)	62 (7.0)	887 (100.0)
	合計	525 (44.5)	401 (34.0)	186 (15.7)	69 (5.8)	1,181 (100.0)

注) 括弧内はパーセンテージ。

表8 「年齢(50代)」と「女の子あり」別のキッズコスメについての認知度や購買経験

		知らなかった	聞いたことはある	見たことはある	購入経験あり	合計
女の子あり	年齢(50代)	146 (57.7)	72 (28.5)	30 (11.9)	5 (2.0)	253 (100.0)
	年齢(50代以外)	195 (40.0)	150 (30.7)	92 (18.9)	51 (10.5)	488 (100.0)
	合計	341 (46.0)	222 (30.0)	122 (16.5)	56 (7.6)	741 (100.0)
	年齢(50代)	210 (62.5)	106 (31.5)	15 (4.5)	5 (1.5)	336 (100.0)
女の子なし	年齢(50代以外)	748 (58.5)	351 (27.5)	130 (10.2)	49 (3.8)	1,278 (100.0)
	合計	958 (59.4)	457 (28.3)	145 (9.0)	54 (3.3)	1,614 (100.0)

注) 括弧内はパーセンテージ。



## 4. 考察

子どものおしゃれに対する大人の態度について、デモグラフィック要因との関連から、その特徴を明らかにすることを目的とした。子どものおしゃれがいつ頃からであれば許容できると思うか、子どものおしゃれについてどのような考えを有しているか、そして、キッズコスメを知っているか、この3点について、性別と年齢、そして子どもの有無・性別との関連から検討を行った。なお、今回は女子のおしゃれについてのみ扱った。

### 4-1. 子どものおしゃれの許容開始時期

子どものおしゃれの許容開始時期については、女性の方が男性に比べるとやや許容の時期が早い傾向にあることが確認された。今回扱ったような多種のおしゃれは、成人であれば一般的に女性が男性よりもおこなっている。そのため、女性は各おしゃれへの親和性が高く、そのことが許容の時期が早い要因になっていると考えられる。また、従来の研究では、女子の方が、男子よりも外見についての興味関心を有し、また、行動にもそれが反映されていることが示されている(大久保・斉藤, 2014; 向川, 2006)。女性自身も子どもの頃におしゃれへの興味や関心を有していたりと、子どものおしゃれへの共感もあるため、女性の方が男性よりも許容時期が早いという結果になったとも考えられる。もしくは、男性は過去に同年代の異性がおしゃれを行い始めた時期を基準として考えているために、このような結果になった可能性もある。つまり、おしゃれの低年齢化が今ほど生じていない時代の同年代の異性の状態を基準にしている可能性がある。親は、子どものおしゃれの現状を知り、そして社会における許容の程度も把握したうえで、どのように子どものおしゃれと向き合っていくかを考えていく必要がある。

子どものおしゃれの許容開始時期と年齢との

関係も確認された。そして、全体的には、女性におけるその関連の程度は男性のそれよりも強いことが確認された。先述のように、1990年代後半から、子ども向けファッション雑誌が刊行され、その時代に10代だった者は、ファッション雑誌を読む機会があることになる。つまり、その前の世代とは異なり、当該世代は、思春期においてファッション雑誌に接触しうる点で、それよりも前の世代とは環境が異なっているといえる。このことが、許容に対する態度の差異となつてあらわれている可能性がある。また、博報堂(2018)の「生活定点1992-2018」によると、「普段着」と「外出着」および「装飾品・ファッション小物」などに現在お金をかけているとする者は、女性においては2000年代になると20代が他の年代よりも割合が多い。2000年代は、1990年代に先述の「女子高校生ブーム」を10代で過ごした者が2代になった時期に該当する。10代のデータは扱われていないが、この1990年代と2000年代の20代の傾向からは、1990年代に10代だった者のおしゃれに対する志向性の高さが反映されていると考えられる。一方、1990年代にそれよりも上の世代においては、そのような経験をしておらず、本人自身が子ども時代におしゃれを制限されてきた世代といえる。このことが、許容開始時期の認識に抑制的に影響している可能性もある。なお、博報堂(2018)における「ファッション動向に敏感である」に対しても、2000年代に入ると20代が突出して高い割合を示していることも確認できる。これも、「女子高校生ブーム」を経験した者の特徴として考えられる。このように、「女子高生ブーム」を経験しているか否かに対応した、調査時点で30代と40代の者の間にて、おしゃれに対する許容といった態度に差異が生じていることが考えられる。

プチ整形・美容整形については、男性の過半数はいつになっても行わない方が良いとしていたが、女性の場合は過半数が最終的にはかまわないとしていた。鈴木(2017b)においては、女

性の方がプチ整形に興味を有し、また、経験があること、美容整形も女性の方が興味を有していることが示されている。このように、成人において女性の方がプチ整形・美容整形への親和性が高いために、子どものそれに対してより許容する傾向があると考えられる。今後、プチ整形・美容整形の低年齢化が進んでいく可能性はある。

子どもの有無や子どもの性別によって、許容開始時期は異なることも明らかとなった。その理由として、子どもの年齢や親の年齢と性別などの要因が交絡してしまった可能性が考えられる。なお、先行研究では、未就学児時から高校生の娘がいる母親における子どものおしゃれの許容開始時期は、ピアスと毛染めを除き今回よりも早いものとなっている（鈴木,2018）。女の子の子育て最中の者は、子どもを取り巻くおしゃれに関する環境をより把握し、また、娘とそのことに関してコミュニケーションをおこなっているために、許容の割合が大きいために想定される。本研究における知見はそれと異なった傾向にあるが、これも、今回の対象において、娘がいるとしても年齢や親の年齢が多様であり、それが交絡してしまっているためと考えられる。

#### 4-2. 子どものおしゃれに対する考え

子どものおしゃれに対する考えについては、許容的なものと非許容的なものが存在していることが示唆された。許容については、一般的な意見を第三者的に尋ねていること、つまり、本人や自身の子どもなど近い者についてではない一般的な子どものことについて尋ねているために、「別にやりたい人はやればいい」といった消極的な許容の態度が存在している可能性がある。

子どものおしゃれに対する考えと性別、年齢、子どもの有無・性別との関連については、全体としては、年齢が高いと許容的な態度は弱く、非許容的な態度が強いことが明らかとなった。近年の子どものおしゃれの低年齢化の中で、年齢が低い場合は、子どものおしゃれに関する情報

や商品を目にすることが多く、場合によっては子育てにおいて自身が子どもに要求されることもあるなど、子どものおしゃれが比較的身近なこととしてあるために親和性が高まり、許容的な態度が形成されていることが考えられる。一方、年齢が高いと、おしゃれの低年齢化がそれほど進んでいない時代に子育てをおこなったために子どものおしゃれを見聞きする経験が少なく、そのために非許容的な態度が維持されやすいといったことが生じている可能性が考えられる。時代による子どもの頃の経験の違いが存在し、そして、その経験によって態度が形成され、今回のような結果になった可能性はある。また、先述の「女子高生ブーム」の影響が反映されている可能性がある。

子どもおしゃれ許容および子どもおしゃれ非許容と、子どものおしゃれの許容開始時期との関連について検討したところ、前者において負の関連が認められた。つまり、子どものおしゃれを許容する考えを有しているほど、開始時期も早くてかまわないとしていることが読み取れる。子どものおしゃれの許容は、単におしゃれを肯定的に捉えているわけではない。「かわいらしい」という比較的肯定的な内容、「似合うのであれば良い」といった条件付きの内容、「好きにすればよい」などの無責任ともとれる内容、そして「遊びの一つ」とした一種の子どもの文化の認識といった内容など、幅広い内容についての項目が含まれている。全体的には、当事者として積極的に肯定するような内容ではなく、消極的許容といったものが主といえる。このような考え方が、社会における子どものおしゃれに対する規範を緩やかにするものとなり、結果として子どものおしゃれが広がっていく要因の一つとなっている可能性はある。

#### 4-3. キッズコスメの認知度

キッズコスメについては、女性でありそして女の子がいると、知っていたり購入した経



験が多いことが明らかとなった。女性の方が男性よりも装いに関心が強いこと、また、本人が子どもの頃に見聞きしていたり購入してもらったりした経験があるためと考えられる。そして、女の子がいると、子どものおしゃれについての情報に接する機会も多いために、このような結果になったと考えられる。また、女の子がいて50代ではない場合に、より知っていたり購入していたりすることも確認された。キッズコスメ自体は歴史が古い。1960年代以降、スキンケア化粧品を中心に、子どもを対象とした化粧品などが発売されている。しかし、安全上そして教育上、子どものおしゃれは許容されておらず、厚生省が子どもを対象にした化粧品を許可しない方針を打ち出すなど(朝日新聞,1971)、当時も子どものおしゃれは許容されていない。子どものおしゃれはごく近年までほとんど許容されておらず、実際にはほぼ広まっていたとはいえない。そのため、年齢が高いと、実際に見た経験や購入した経験が少ないと考えられる。そして、年齢が低く、かつ女の子がいる場合は、先述のように、女の子がいるというその環境のために、見聞きしたり購入したりした経験が多い傾向にあるといえる。

ところで、女の子の有无は、子どものおしゃれに対する態度には影響していなかったが、キッズコスメの認知度には関連していることが確認された。つまり、見聞きしても態度が変わらない可能性や、または、態度が変わらなくとも、子どもの要求に応じて本意ながらも購入している場合があることも想定される。

#### 4-4. まとめ

どのような装いが、どのような対象(性別や年齢や地位など)で許容されるかは、時代や文化で異なる。また、許容についての考え方の個人差も大きい。そのため、絶対的な線引きをおこなうことは難しい。少なくとも現状では、子どものおしゃれが全面的に許容されているわけ

ではない。しかし、おしゃれは子どもに広まっており、今後、社会の側の許容も変化してくる可能性はある。母親をはじめ周囲の人々は、安易に子どもが過剰におしゃれにとらわれないように注意し、また、巻き込まないように気をつける必要がある。

小さい頃からのおしゃれへのこだわりは心理的に負担となるだけでなく、先述のように身体のトラブル(e.g.,岡村,2003,鈴木,2018)につながることもある。そのため、適切なおしゃれについて、家庭と学校保健での教育が重要になってくると考えられる。大久保・斉藤(2014)により、小学校と中学校の教員の82%が、おしゃれによる身体トラブルについて認知していないこと、また、特に指導しようと思わない者が多いことなどが報告されている。石田(2006)は、大人が子どもに対して的確な助言や指示や注意などを出すことがない、あるいはできないままに子どもの化粧を見過ごしているケースが多い旨、述べている。おしゃれによる身体トラブルについて親や教員が適切な知識を得て、子どもにおしゃれの方法、例えば化粧品の使用方法や、生じうるトラブルなどについて教育していく必要もあろう。そのためにも子どものおしゃれに対して偏った考えを有するのでは無く、実態を踏まえた適切な認識を大人がおこなう必要がある。

子どもがおしゃれに興味や関心を有し、また、それを刺激するような環境が準備されている状況において、おしゃれに興味を持った子どもに対して、単におしゃれの禁止を押しつけるだけでは、現状に対応しきれない可能性がある。風戸(2017)において、学校制度に枠づけられた仲間集団の中で、化粧という表現手段により同調や差異化、そしてコミュニケーションなどが生じていることが言及されている。また、化粧により自分のコンプレックスに向き合うといったことがおこなわれていることも言及されている。おしゃれは所属する社会の中で選択されるツールであるが、その集団の中での対人関係の構築

などの、社会生活を営むうえで重要なツールの一つであり、そして、自己と向き合う上でも重要なツールの一つでもあることを忘れてはならない。そのように考えると、子どもに広がっているおしゃれを一律でよくないものとして対処することは、非常に乱暴な対応といえるのかもしれない。そして、子どもの特定のおしゃれの経験割合が大きい場合、許容するかしないかという問題ではなく、適切な使用法を教えることが対応として有用になってくる可能性もある。

子どものおしゃれを許容するのか、または許容しないのかは、現在、そして今後の社会、特に教育の現場においても重要な問題であるといえる。その際、大久保・斉藤(2014)も述べているように、家庭と学校との連携が重要になってくるであろう。大人や教育機関等が子どものおしゃれに対してどのようなバランスで規制し、もしくは、おしゃれの知識や技術を教えるのか、実態を適切に把握した上で、見極めていく必要がある。

なお、今回の研究の限界点として2点挙げられる。1点目は、サンプルの偏りである。今回は居

住地等について層別抽出などはおこなっていない。デモグラフィック要因との関連は確認できたとはいえ、サンプルの偏りが存在するために、現状の実態把握には至っていない。社会が子どもの装いをどのように受けとめ対応していくかについては、実態を明確にする必要があり、そのためにもサンプルの偏りの無い方法での検討が必要といえる。2点目は、所謂satisficeの問題に対応できていない点である。web調査においてsatisficeデータの影 響の問題点が指摘されているが(e.g., 三浦・小林, 2015), 今回は調査実施の都合上、その検出ができていない。web調査をおこなっているため、satisficeの問題は無視できないものといえる。他の方法で得られる回答傾向と異なった回答傾向が今回得られている可能性は否定できない。実情を明確にしていくには、この点について十分に対策をおこない検討していく必要がある。今回の知見については、satisficeの問題による限界点を踏まえたうえで、解釈を慎重におこなう必要がある。

## 文献

朝日新聞, 1971, 「“ちびっ子化粧品” 禁止 口紅、マニキュア感心しません」『朝日新聞3月1日朝刊』15.

———, 1992, 「化粧体験早い女高生」『朝日新聞1992年2月7日』17.

———, 2010, 「子ども脱毛エステ時代 「毛深い」 からかわれたくない 3歳も利用」『朝日新聞2010年5月9日朝刊』35.

博報堂, 2018「生活定点1992-2018」〈<https://seikatsusoken.jp/teiten/>〉(2019年1月11日).

石田かおり, 2006「児童・生徒の化粧実態とその問題点: 化粧教育提案のための実態分析」『駒沢女子大学研究紀要』13: 27-41.

———, 2007「わが国における化粧の社会的意味の変化について——化粧教育のための現象学的試論」『駒沢女子大学研究紀要』14: 13-24.

株式会社ベネッセコーポレーション, 2001, 「子どものやせ願望——見た目を気にする子どもたち」『モノグラフ・小学生ナウ』21(2).

株式会社ジンコーポレーション, 2014, 『脱毛に関する意識調査』.

株式会社ジェイ・エム・アール生活総合研究所, 2013, 『女子小学生の化粧意識と実態調査』.

風戸真理, 2017, 「身体装飾をめぐる子ども・大人・社会の交渉」『コンタクト・ゾーン』9: 347-366.

三浦麻子・小林哲郎, 2015, 「オンライン調査モニタのSatisficeはいかに実証的知見を毀損するか」『社会心理学研究』31: 120-127.

岡村理栄子, 2003, 『おしゃれ障害——健康を害する誤った“おしゃれ”に警告(写真を見ながら学べるビジュアル版 新体と健康シリーズ)』少年写真新聞社.



- , 2011, 「子どもたちのおしゃれ障害」『日本化粧品学会誌』35: 113-117.
- 大久保香梨・斉藤ふくみ, 2014, 「小中学生のおしゃれに関する研究：主におしゃれ障害に関して」『茨城大学教育学部紀要・教育科学』63: 219-230.
- 鈴木公啓, 2017a, 「子どもの装いを考える」, 近藤俊明・渡辺千歳・日向野智子編『子ども学への招待——子どもをめぐる22のキーワード』ミネルヴァ書房: 129-139.
- , 2017b, 「美容医療（美容整形およびプチ整形）に対する態度—経験の有無や興味の程度による比較—」『東京未来大学紀要』11: 119-129.
- , 2018, 「子どものおしゃれの低年齢化—未就学児から高校生におけるおしゃれの実態」『日吉紀要 言語・文化・コミュニケーション』50: 53-69.
- 玉置育子・横川公子, 2003, 「化粧文化史の変遷と流行した化粧の受け入れ方についての研究」『コスメトロジー研究報告』11, 83-94.
- 東京都生活文化局, 2007, 「化粧品類の安全性等に関する調査結果【概要】抜粋」.
- 向川祥子, 2006, 「被服に対する意識及び行動とそれに影響する要因」神戸大学博士論文.
- 読売新聞, 2005, 「生活フォーラム 子ども化粧 どう思う？ 3～9歳「経験8割」」『読売新聞2005年3月23日朝刊』27.

## 注

- 1) 2018年7月時点で160万人が登録している。他のweb調査サービス登録モニタと比較すると各デモグラフィック変数における内訳は類似した割合である。なお、回答者の居住地については、現実の人口動態に比べ、若干関東地方の割合が大きめであるが、今回の内容及び分析の観点からは特段の問題は無いと考えられる。
- 2) 成人男女30名に、子どものおしゃれについてどのように思うか自由記述で回答を求めた。なお、web上にて2018年5月に実施した。
- 3) 本研究の統計的仮説検定における有意水準は5%とする。
- 4) ここでの値は顕在変数である得点間の相関であるため、表3における値（潜在変数である因子間の相関の値）とは異なっている。
- 5) 結果の解釈が煩雑になることもあり、2次の交互作用については投入していない。